

フィッシャーの所得理論 の計理學的根據

フィッシャーはその著 *The Nature of Capital and Income* の中に於て、經濟學の理論を計理學に適用すべきこと、從て計理學の理論的根據をそれに依て築かんとする希望を明かに述べて居る。(P. 115) かゝるフィッシャーの企てを計理學の見地より觀察して、現在吾々が理解する計理學理論との關係及調和について研究を試みんとすることが以下記するところの目的であつて、こゝには特にその所得理論の考察を努める。

フィッシャーは先づ具體的財貨なる資本の觀念と、財貨が與ふる貢獻の流れより成る所得の觀念とを明かに區分して、兩者の混同より生ずべき誤謬を極力避けんことを努め、所得は抽象的貢獻であるから具體的財貨とは全然引離して考慮すべきものとする。而して各種の所得觀念を大體次の三種に分ける。(1) 貨幣所得の觀念、(2) 實質所得の觀念、(3) 享樂所得の觀念。

(1) 貨幣所得の觀念　は主に商賣上所得といふ時用ひられる考へであつて、商賣に由て受入れられた貨幣額より、それがために支出せる貨幣額を差引きたる殘高を指すものである。これは商賣の性質に依ては適切なる觀念といふことが出来るけれども一般所得の觀念をこの内に全部包含せしめんとすることは困難である。例ば農民がその小作料を作物を以て納め或はその産物の一部を自らの消費に用ふるが如き場合に於ては、これ等の産物も亦農民の所得中に計算すべきものと考へられる。支出の側に於ても、貨幣の外に農民自らの勞働もその中に屬し又作物を以て肥料を買入れたるが如き場合に於ては、これも亦犠牲の中に加へなくてはならない。即ち非金銭的の收支が存する點より考へて、貨幣所得の觀念はこの意味に於ける一般所得の理論として適切にあらざることが知られる。なほ又他方に於て、貨幣所得はたゞ他の財貨を取得する手段として役立つに過ぎないものであるから眞の所得ではないといふ反對が唱へられる。即ち勞働者が受取る金銭的所得はその Real wages にあらずして、それは單に食物、衣服、及家屋等の形に變ゆるための手段に過ぎない。故にその Real wage はこれ等の Real form に於ける所得でなくてはならないと考へられて新に Real Income の觀念が産れて來た。

(2) 實質所得の觀念　は貨幣所得の缺點を補はんがために更に内面的觀察をなしてその眞實の要素を捕捉せんと試みることは右に述べた通りである。通常實質所得の説明としてそれが享樂的財貨、及貢獻より成るとせらるゝけれども、かくの如く財貨と貢獻とを同一視して所得觀念の中に兩者を含ましむることは適當でない。かゝる論者に依れば、享樂的財貨にして所得の中に加ふべきものはその永續性の少きも例ば食物、燃料及衣服等を指

し、單にその貢獻のみ所得と考ふべきものはその永續性大なる財貨例ば家屋の如きものであるとする。而してこの中間に位する馬車、家具、及樂器等の如きものに就ては何等一定の標準を示さざることが多く、或人々は新に獲たるピアノを以て所得の一部と考へ、他の人々は單にそれより受くる音樂のみを所得となし、又他の人々はピアノ及音樂の兩方を共に所得と看做す。乍然フィツシャ―に依れば所得の本質は抽象的貢獻であるとするから、ピアノに就てはその貢獻たる音樂のみ所得であつてピアノ自らは資本である。新に建てられ又は買入れられた家屋は決して所得にあらずして、その後現はれる家屋の貢獻のみが所得である。若しもパン、ピアノ、家屋等の具躰的財貨を以て所得の一部と考へ、更にそれ等のものより受くるところの貢獻をも亦所得であるとすれば、所得の二重計算が行はれることとなるであらう。故に所得の觀念は常に抽象的貢獻を指すものであつて、具躰的財貨はこの中に包含せしめてはならない。

(3) 享樂所得の觀念　は財貨の最終階段に於ける所得の觀念であつて、肉躰と財貨との關係である。即ち財貨が肉躰を刺戟する力であつて、肉躰を機械の如く想像すれば、總ての要素の貢獻をこの機械の勘定の借方に記入し、同時にこれ等要素の勘定の貸方に同額を記入するならば、客觀的所得の要素は悉く相殺せられて、最後に残るところの所得は人間の躰が感ずるところの貢獻に歸する。故に享樂所得は人間意識の流れであつて、資本がその所有者に供する精神的満足即ちこれに依て所有者が受くるところの意識上の經驗を意味する。

二

フィツチャーに依れば、資本の所得は單にそれが吾々のために役立つところの働きであつて、それが貨幣を持來たすことであつても、又はその他のものを持來すことであつても少しも違ひはない。而してこゝで貢獻といふのは、一の財貨が手段となつて、惹起せられる望ましき事實、又はそれに依つて望ましからぬ事實が防止せらるゝ事件を指すのである。人間のする總ての仕事、工業の總ての活動及商業上の總ての流通等はいづれも貢獻であつて、農業、鑛業、交通業、及商業等は農耕地、鑛山、鐵道、及商業資本、等に依て完成せられる貢獻の結合躰に對してつけられたる名稱である。

これ等の貢獻に相對して他方に犠牲即ち財貨の爲めに惹起せられる望ましからぬ事實、又は防止せられたる望ましき事實が存する。即ち消極的貢獻の流出であつて、それが所有者より貨幣を奪ひ去る如き場合なると、その他の望ましからざる事實に由る場合たるとを問はない。かゝる犠牲が貨幣の形をとるときそれを經費と呼び、それが人間の勞作なるとき勞働と呼ばれる。即ち經濟學者が Cost と稱する總てのものを包含し、Labor, trouble, expense 及その他總ての種類犠牲が孰れもこの中に屬する。

而して一の財貨より一定期間に流出する總ての貢獻の價值即ち所得の總ての要素の合計が總所得であつて、これより犠牲即ち支出を差引きたる殘高が純所得である。又若し支出が所得を超過すればその差額は純支出である。

所得はその源泉として資本を有し、その受益者として資本所有者を有する。甲が農耕地より獲得する所得といふときは、耕地が所得を産出して甲がこれを受取ることを意味する。而して所得を研究するに當ては、主として、資本との關係を考慮することを要し、資本所有者との關係は耕地を所有者の勘定として見ることに依て了解出来る。即ち彼に入り來れる總ての所得は元帳の一方に記入せられ、耕地に credit されるといはれ、その支出は同様に debit されるといはれる。故に貸方項目は一定の資本より生出せらるべき所得を現はし、借方項目はそれがために生ずる支出を示すものであつて、これ等二種の項目は資本の所得及支出の勘定に現はるべきものである。今資本の一項目として土地付家屋を想像して右の理論を適用すれば、この資本が所有者に持來すところの所得は貨幣の形に依る家賃であるか又は所有者及その家族に對す庇護の貢獻であるが、この後の場合であつても、この所得を貨幣に依つて計算することは評價に依つてなされる。而してこの家屋は極めて古きものであつて廢屋に近き状態にあると假定し、且一ケ年千弗宛の所得を生じ、支出として修繕、税金等を要したりとする。

Income for House and Lot during year 1910

<u>Income</u>	<u>Outgo</u>
use of house & Lot \$ 1,000-	Repairs \$ 200-
Taxes 100-	
\$ 1,000-	\$ 300-

となつて、この年の純所得は七百弗である。この翌年家屋が崩壊に近くなつたため、これを改築して、それに六ヶ月を要したりとすれば千九百十一年上半期は所得全くなくして、新築費の支出のみあり、下半期は一ヶ月百弗宛にて貸されたりとする。この場合建築費は犠牲であつて家に依て惹起されたる望ましからぬ事實である。即ち將來獲らるべき貢献のためになされたる犠牲であつて、それに依て Good に導かれるものであるが、それ自らは evils であるこの結果は次の如き勘定となる。

Income for House and Lot during 1911

<u>Income</u>	<u>Outgo</u>
Use of House & Lot \$ 600-	Expense of Building \$ 10,000-
	Taxes 100-
	\$ 10,100-
\$ 600-	

即ちこの年は純支出として九千五百弗を生じ、それは、次に來るべき各年度に順次回收せらるべきものである而して千九百十二年の勘定を想像すれば

Income for House and Lot during 1912

<u>Income</u>	<u>Outgo</u>
Uses of House and Lot \$ 1,200-	Repairs \$ 50-

\$ 1,200-

\$ 200-

即ち純所得一千弗を生じて、この状態がなほ四十九年間同様に繼續せられたりと假定すれば、この間に五萬弗の純所得を造て千九百十一年の超過支出を相殺してなほ巨額の錢高を生ずる。これが利子の性質を有するものである。

右の計算に於て、家屋再築の費用を修繕其他の經常費と全く同様に取扱ひたることについては有力なる反對が起るであらう。再築費は資本的支出であるから所得勘定に屬すべきものにあらずして、資本勘定に屬すべきものであるとの非難が加へられる。かゝる反對論に對して、フィツシャ―は新家屋の價值とその費用とを區別して、前者は資本價值として資本勘定に入るけれども、その建築の費用は所得勘定に入るべきものといふ。即ち前者は具體的なる財貨を代表し、後者は抽象的なる犠牲を現すものであつて、或期間に惹起された勞働其他の犠牲の連續と家屋とは全く別物である。通常この兩者を混同して、かゝる犠牲も費用價值として資本勘定に記入せられ、會社の帳簿に於ける負債側は會社に依て受取られた貨幣の高を示し、その資産側はそれが如何に使用せられたるかを示すものと解釋せられるけれども、嚴格にいへば、それは誤れる觀念である。何となれば家屋の市場價值は *net cost suitability* に依て評價せられるものであつて、その建築のために投ぜられたる貨幣に依るものではないから。故に一萬弗を以て建設せられた家屋も一萬弗以下の價值を有つこともあるのであつて、かゝる場合には所得

勘定の支出側には一萬弗記入され、資本勘定の數字はそれより小なる筈である。

乍然フイツシャー自らも認むるが如く、家屋建設費を犠牲として所得と直接對立せしむることは極めて變則の考へ方の様に思はれる。この點について更に詳しく彼の説くところに依れば、かゝる考へ方の結果として家屋の建築作業は犠牲を形成して、生産とならない様に解釋せらるるが、大工がその道具を使って家を建てる場合には、二ケの資本のグループを考へなくてはならない。即ち第一のグループとしては大工及道具、第二のグループとしては道具が働きかけるところの對象物、を考へなくてはならない。それが家屋に依て惹起せられたりと見るとき、建築及修繕は犠牲であつて、家屋はこれ等の費用を吸収して、將來に於ける新しき貢獻又は前よりはより好き貢獻を約束するものである。即ちゆるみたる家根板に再び釘を打つけることは家屋の存在する目的ではなくして、家から見れば、それは當然犠牲であらう。然るにこれを金槌の側から見れば明かに貢獻である。故に家屋の建築及修繕は一方に於て貢獻であると同時に他方犠牲であるといふべきである。フイツシャーに依ればかゝる兩面的事件を財貨の交互活動(interaction)と名づけて、この點が計理學に於ける複式簿記の原理と一致するものと説明せられる。即ちインタークションは acting instrument の貢獻と instrument action の犠牲とより成るものであつて、例ば A、B、なる二ケの資本のグループがあつて、A が B に cion すると假定して、それに依て B が利益を受けたりとすれば、このインタークションの性質如何に拘らず A はこれに依て credit せられ、B は debited せられる。従て貸方と借方とは同額となつて、これより生ずる唯だ一つの結果は、それに依て B は將來に於て、

より多き所得の獲得を可能になされたといふことである。

この説明に於て、フィツシャーは労働及其の用具と家屋との關係にのみ留意して、労働及其の用具のなすプロセスと家屋の利用とを對立せしめ、前者を経費として借方記入の項目と考へ、後者を所得として貸方記入の項目と考へる。而してこれ等の關係に於て貨幣の收支が介入することについて説き及んで居ないけれども、現時の社會組織の下に於てはかかる經濟活動については常に貨幣の作用を仲介として考へなくてはならない。今この場合貨幣を中間に挟んで考へて見ればその關係は次の如く現はされる。

<u>Debit (Outgo)</u>		<u>Credit (Income)</u>	
	Cash \$1,000		Rent \$1,000
(1)	Repairs 200		Cash 300
	Taxes 100		
	Cash \$600		Rent \$600
(2)	Building 10,000		Cash 10,100
	Taxes 100		
	Cash \$1,200		Rent \$1,200
(3)	Repair 50		Cash 200
	Taxes 150		

右の例に於て若しフィツシャアの如く、貢献とそれの源泉たる財貨とを全然分離して考へるとすれば、建てられた家そのものが貢献にあらずして財貨であるといふことと同様に、受取られた貨幣そのものは貢献にあらずして財貨であるといはなくてはならない。故に貨幣の貢献は他の財貨についてと同様に、將來に於けるその貢献であつて、貨幣を受入れたることは、かゝる將來に於ける貢献の約束に對する犠牲であると解釋せなくてはならない。

從てフィツシャアの説けるが如き貨幣所得の觀念はその一般所得の理論とは一致せないのであつて、貨幣についても亦その所得は抽象的なる心理的經驗を意味するものとせなくてはその理論が一貫せない。かくの如くなりとすれば、右の取引仕譯に於て借方及貸方は常に支出と所得とを示して少しも純所得を生ぜざることとなる。これに反して單に貨幣そのものの收支だけを考慮すれば(1)借方殘七百弗、(2)貸方殘九千五百弗(3)借方殘一千弗を生ずべく、貨幣を除外して考ふればこれと貸借正反對の殘高が見らる筈である。而してフィツシャアが説くところの一般所得の理論はこの後の場合であつて、(1)に於ては純所得七百弗、(2)に於ては純支出九千五百弗(3)に於ては純所得一千弗、と計算するものである。即ちフィツシャアの理論が成立するためには、貨幣を交へざる考へ方に依ることを要するものであつて、現在の如き經濟組織の下に於ては到底適合せぬ假定理論であるといはなくてはならない。

この點は更に議論を進むれば、結局利益の源泉に關する經濟學上の論争にも關聯するものであつて、フィツシャアの如く、財貨の個人的利用と所得とを全く分離し難き固有關係に依て結び着けて、所得は飽く迄財貨とそ

の所有者個人との間の利用關係であると考ふることに、即ちその財貨が最終利用者に働きかける作用（自然所得）又はそれより所有者が受くる精神的満足（主觀所得）に限らるゝものとする考へは、現時の經濟社會に於ては正しき理論とは信ぜられない。吾々が現在見る資本主義制經濟社會に於ては、利益は交換價值又は價格の理論より説明せらるべきものであつて、物理的生產過程又は個人心理的經驗よりのみ解釋せらるべきものではない。

フィツシャーは前記家屋建設の例について説明を加へ、新資本の價值とその建築費とは全然別個の事實であつて前者は資本勘定に屬すべきであるが、後者は所得勘定に屬すべきものと解釋せること既に述べたる如くである。この兩者の區別はこれを市場價格と原價との關係として考ふれば非常に有益のものとなるけれども、フィツシャーの説けるが如き意味に於ては矛盾がある。彼の如く資本關係と所得關係とを全然引離して、所得と何等の交渉なく單に資本財のみの關係を考慮することは、結局財産の變形、變所、及變時の關係をその儘記録することとなつて價格關係はこれを度外視して考へなくては意味をささない。例ば

<u>Debit (Cost)</u>		<u>Credit (Income)</u>	
Merchandise	5,000	(Cash)	
		Merchandise	5,000
(Cash)	5,200)		5,200

右の場合に於て商品のみ流通關係を考慮することは物的變動關係にのみ注目して、これと對應する貨幣を度

外視することとなるべく、若しも貨幣關係を交へ、從て價格關係を考慮の中に加ふれば、資本財の變動即ち舊資本が變じて新資本が成立すると同時に當然所得の問題が惹起せらるゝものと解さなくてはならない。又資本關係と少しも交渉なく、所得關係のみを考慮する場合について見れば、最後に於て財貨が消費せられる場合のみのことを考へて、消費に達する迄のプロセス總てが犠牲であつたと稱することを得るとしても、經濟學上かゝる場合所得の發生を認むべからざるものであつて、それは單に個人的利用の實現と見るべきである。而してこの中途の過程に於て、五千圓の商品を買入れて五千二百圓に賣りたりといふ場合所得といひ得るものは純所得二百圓であつて、それは五千圓なる原價と五千二百圓なる賣價とが對立して残た差額である。故にフィツシャーの所得理論は常に、彼の謂ふ終極所得の觀念即ち個人的利用の觀念がその基礎となつて居て、これより總ての理論が導かれるけれども、計理學上の收益觀念は、價格成立の一因子として終極利用の心理要素を否定せないけれども、事實上利益を決定するものは市場價格であるとする。故にフィツシャーの理論は、所得が生産の側より來らずして、消費の側より來るところの價値の問題なることを示して、利益の源泉を正しき方向に導きたる長所はあるけれども、彼が意味するところの價値は、實は個人的利用であつて、現時の經濟社會に於ける利益の説明基礎としては十分の効果を有せざるものといはなくてはならない。

フイツシャーが兩面的事實として複式簿記の根底とするインタークションの活動を更に詳しく觀察すれば、これを(1)財貨の變形(Form of wealth)(2)財貨の位置の變化(position)及(3)財貨所有者の變化(ownership)即ち換言すれば Transformation, Transportation 及 Transfer の三種に分けて説かれて居る。

(1)變形(trans-formation)は通常生産又は生産過程と稱せらるゝ事實と同一であつて、かゝる form の上に生ぜられたる變化は要するに財貨の各部分の比較的位置の變化である。例は Weaving とは經糸と緯糸の比較的位置を整頓して、糸を布に變化せしむることであつて、同様にして紡績は纖維の運動引き延し、及撚糸等に依て棉を糸に變化せしむることである。かくの如く總ての工業及農業は財貨の變形の連續より成り、これ等の變形は常に二ヶの方面を有する。即ち一方 transformed instrument の側に於てはこの變形は犠牲であるけれども、他方 transforming instrument の側に於てはそれは貢献である。既に述べた通り、大工及その道具が家を transform したとき(即ち建て又は修繕したとき)は彼及道具は credit せられ、家屋は debit せられる。靴工が革を靴に變形するときは彼は貢献をなし、靴はその各工程毎に犠牲を惹起しつゝあるのである。同様にして糸から布を生産する織工はその工程を所得として credit せられ、布の stock はそれを以て生産費として debit せられる。transformation に由て消失して、更に全體として、或は部分として生産物となつて再び現はるゝ財貨を原料品と稱する。而して Cost of weaving は原料として糸の消費を含み、この糸はそれ自らの側より見れば犠牲にあらずして貢献である。即ちそれは糸が存在する目的である。同様にして布が著物に變化せられると

き、布は credit せられ着物は debit されるのであつて、總ての原料品はそれが製造品に變形せられるに従て貢獻を與へるけれども。同時に又その産物の側に於てそれは常に犠牲である。

(2) 變所 (transportation) は財貨の場所の變化であつて (1) と異るところはその位置の變化が財貨全體としてなされる點にある。故にその關係は兩者全く同様であつて、或財貨が輸送せられたるときはこの作業の價値がその財貨に debit せられ、同時に輸送作業に credit せられる。

(3) 所有者の變化 (transfer) は通常一對の事實より成り、二人の所有者間に相反する方向への transfer がなされるところの二ヶの財貨を含む。例は本屋が書物を賣たときは、一方に於て賣手の book stock と買手の book stock との間に transfer が構成されると同時に、他方兩者間に cash stock の transfer が構成される。而して賣手は book stock に credit し cash stock に debit するに反して、買手は book stock に debit し cash stock に credit するから、これを合せて相殺すれば、社會には何等の所得も残らない譯であつて、結局所得として考へらるゝところのものは單り自然所得と呼ぶるゝものに限られることが分る。即ちこの場合書物の與ふる自然所得が生ずるのは本屋がこれを賣た時にあらずして、讀者がこれを読みたるときであつて、販賣は本屋に對する貸方項目及買手に對する借方項目となり、それは單に豫備的貢獻に過ぎない。同様にして、森林は樹木が切り倒され、丸太に造られ、小屋に建てられ、これに住はれるといふ最後の階梯に達する迄は、自然所得を與へるものではない。アダム、スミスは家は家賃の形式で所得を生ぜしむるけれども、家主に依て住居せられる家は少し

も所得を生ぜしむるものにあらずと考へた。然るにフイツシャーに依ればこの關係は寧しろ正反對であつて、この兩種の場合何れも所得を生じては居るけれども、眞の所得は家が供する shelter の作用である。貸出された家の家賃は家主にとつて所得であつても、借主にとつてそれは支出であるから社會的にはこれが相殺されて、残るところは借主が受くるところの家の貢献である。故にこの shelter incomeこそ根本的且永久的項目であつて、これなければ家主に對する rent income も存在し得ないであらう。鐵道について見ても同様にして、その社會的所得としては、貨物及旅客の輸送といふ自然所得を發生せしむるものであつて、貨幣に依る運賃は荷主又は旅客にとつて支出であるから鐵道會社の貨幣所得がそれに依て相殺せられる。故にかくして相殺される貨幣所得を切り離して考へれば、資本は money making machine ではなくして Production, Transportation, Gratification 等について貢献するところのものであると解することが出来る。耕地よりの所得はその收獲であり、鑛山よりの所得は鑛石の生産であり、製造工場よりの所得は原料より製造品への變形であり、又商業資本よりの所得は生産者より消費者への商品の通過であり、消費者の手にある財貨よりの所得はその享樂又は所謂消費である。

同種のことが支出の側にも適用せられ、結局に於て貨幣的支出の總ては相殺せられて犠牲の形に於て社會に残さるゝものではない。即ち製造業者及商人等が通常生産費と呼ぶところのものは殆んど總て貨幣的支出であつて、給料、原料品、地代及利息等より成るものであるが、これ等總ての支出は、同時に他の人々にとつての所得である。給料は勞働者に、原料品は他の製造業者に、地代は地主に、又利子は貸主に依て受取らるゝところの所

得である。故にこれ等の支出と所得とを相殺した後に Social Balance sheet の上に記さるべき項目として残るところのものはこれ等の中間的階段を除きたる最終利用即ち所謂財貨の消費とこの終極階段に達するまでの人間の努力及苦痛等に限らるゝであらう。

右の理論を例示するために森林より初まつて順次に生産過程を経由する場合を假想すれば、この森林の直接産物は丸太であつて、それが Sawmill に運ばれるとき、森林に對する貸方項目を生じ、Sawmill の stock of logs に對する借方項目を生ずる。それが更に Lumber yard に運ばれ、その Lumber が warehouse の修繕に用ひられ、この warehouse の中に cloth が貯藏せられ、この cloth が倉庫から tailor に行き、それが華客の着物に造られたと假定すれば、この連續事實は次の如き形に於て勘定に示さるゝであらう。

Income for a specified series of investments

Capital source	Income	outgo
Logging camp	Yielding logs to Sawmill \$50,000	Receiving logs from Logging Camp 50,000
Sawmill	Yielding lumber to Lumber yard 60,000	" lumber " Sawmill 60,000
Lumber yard	Yielding lumber to warehouse 70,000	" " Lumberyard 70,000
Warehouse	Warehouse shelter to cloth 80,000	" " " 70,000

Stock of cloth in warehouse	Yielding cloth to tailor	90,000	Shelter from Warehouse	80,000
Stock of cloth of tailor	Yielding suits to Customers	100,000	Receiving cloth from Stock	90,000
Stock of clothes of Customers	Yielding wear	110,000	" suits	"
			" tailor	100,000

右の勘定に於て、右方に於ける各項目と左方の一行上の項目とを順次に相殺すれば最後に残るところの所得要素は wear と $\frac{1}{2}$ 項目のみとなるであらう。

この場合 log_s の値打たる五萬弗はこれを造るための勞働の結果であることから、フィツシャ一の謂ふ意味に於ける勞働の所得と解釋出来るけれども、この log_s が果して五萬弗の價値ありといふことは何に依て決定せられるであらうか、單に働いて造たといふのみでは log_s なる形のもが出来上たといふ丈けであつて、その値打としてはそれを造るための勞力的犠牲か又はその利用についての心的状態の豫想の外には考へられない。又一方に勞働市場が存在して勞働價格が成立したりとすれば、この log_s の生産に要せられたる勞働價格は計算出来るけれどもこれに依て計算せられたる生産物價格は所謂 cost value であつて log_s 生産上の企業収益とは別物である。この場合企業収益として考へらるべきものは、この log_s が市場に於て如何に評價せられるかといふこと又は次の工程に依て如何程に引取らるゝかといふことに依て初めて決まるものである。故にフィツシャ一の

試みたる例についていへば、次のプロセスに引渡されるときに初めて、その一般價格が決定せられ、従て初めて Production of logs の所得が生ずる譯であつて、この引渡す前の價格即ち生産價格と引渡したときの價格即ち市場價格との差額が眞の所得である。故に換言すれば logs を produce することは、cost を發生せしむることであつて、未だ所得は發生せないものである。

四

而して cost が income と並立する關係即ち一方で cost として取扱はれたるものが、他方で所得の流出として考へられるに於いて、フィッツシャーの理論を徹底せしむるためには彼も説けるが如く次の形に於て示されなくてはならない。

Income and outgo of dry goods Co.

Capital source	Income (credit)	Outgo (debit)	
Stock of goods	By goods sold	To goods bought	
	\$ 10,000A	To work of selling	\$ 5,000 c
		To Storage	1,500 h
			1,000 g

Cash.	By cash taken out for :-		To Cash received	
	rent	\$ 1,200 B	from sales	\$ 10,000 a
	purchase	5,000 C		
	wages	1,600 D		
	interest payment	800 E		
	profits	1,400 F		
Store lease	By storage service	\$ 1,000 G	To rent paid	\$ 1,200 b
Rights & obligations from Employees	By clerk work	\$ 1,500 H	To clerk hire	\$ 1,600 d
Bonded debt			To interest paid	\$ 800 e
Capital stock			To profits paid	\$ 1,400 f

第1の Stock of goods はその販賣に依て一萬弗(A)を gross income として會社に與へ、この支拂が Stock of cash に於ては借方項目として(a)記入される。これと反對に rent が支拂はれたときは Store lease が debit (b)せられ、この値打に相當する所得を與へる Cash が credit (B)せられる。同様に cash の收支に關係ある取引は Cash と他の Capital source との兩方に反對記入がなされる。

Rights & obligations from employees は雇人よりの種々なる貢獻の値打が一干五百弗と評價せられこれに

credit(H)られると同時に、stock of goodsに debit せられる。又 Bonds は八百弗を吸収し、Capital stock は配當として決議された Cash の總ての Surplus を吸収する。

然し實際、計理學に於ては、これ等の項目は通常簡單にされて、storage と區別された warehouse の利用價值を評價することなく。又使用人に依りなされた仕事の價值を、支拂た給料と區別して取扱ふこともない。若しこれ等兩者を同額のものとして計算すれば、右の勘定中には一千二百弗の四ヶの項目と一千六百弗の四ヶの項目を含むこととなつて、各二ヶの項目は省略することが出来る。即ち storage services (G 及 g) 及 clerk work (H 及 h) 等の一對の項目は除去せられ得る譯であつて、現金取引のみが残されることとなる。更に Store lease 及 Rights & etc. の二欄を省略することに依て即ちこれ等のものを stock of goods の項目の下に配列することに依て、非常に簡單にされる。

右の例に於て見る如く解釋することがフィツチャーの所得理論成立のために必要であるけれどもかくの如く warehouse の use value と rent とを分ち、又 clerk の work value と wages とを區別して考へ、一方を income 他方を cost とすることは余りに人爲的なる缺點はないであらうか。その事業にとつて warehouse 及 wages の價值が決定されることは、その商品の販賣市場價格に依てのみなされるものであつて、それ以前にこれを計量することは餘りに人爲的であり、且つ不當である。Price が成立するためにこれ等の項目が一要素として作用することは普通であるけれども、それ等のものが直接造り出すところのものは Cost value に過ぎない。

従つてそれのみで所得を發生すべき理由がない。

又フィツチャーはこゝに記したる如き意味に於て、兩側に記入することが複式簿記の根底であると説いて居るがこの場合一方を cost と考へ、他方を price と考ふれば、その理論は甚だ有用なるものであつて、簿記に於て損失が借方に記入され、利益が貸方に記入される理由も明かにされる。けれども複式簿記の根底となるものはかゝる兩面的事件の記帳といふ點にあらずして、財産と資本との對立の點にある。

要するにフィツチャーの説明の歸するところは、各種の生産過程を結合して考慮すればその貸方項目として最後迄残るところのものとして、精神上の満足即ち望まじき意識上の經驗があり、又その借方項目として残るものに苦痛又は勞働があつて、これ等最後の要素が經濟組織の outer fringe を組成し、これを發生せしむべきプロセスに於ける關係が生産工程及商取引等の network であるとすふ點にある。この説明に依て益せらるゝところは、前にも述べたるが如く、價値の源泉が消費の側にあることを明かにする點にあるけれども、市場交換の經濟組織の下に於ける所得の理論としては不完全なるものといはなくてはならない。

五

右の關係はフィツチャー自ら示したる次の例に於て最もよく觀取せられると思ふ。

こゝに事務所用の家屋を借りて法律事務を扱ふ辯護士を假定して、その所有財産が次の如くであつて、一ヶ

月間の所得計算をなすとす。

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| (1) Stocks and bonds. | (2) Lease of house |
| (3) Furniture of house | (4) Other household supplies |
| (5) Cash and bank accounts | (6) Claim on servants |
| (7) Claim on office clerk | (8) His own person |
| (9) Etc. | |

この月株券及社債券が小切手にて二千弗の収入を持來し、その内五百弗を以て新證券を買入れたから、この財産より來る純所得は一千五百弗である。借家權に依て家の利用を享樂するに當てこの利用價値は正確に cost 即ち百弗と一致するとすればこの財産よりは純所得も純支出もない。家は五十弗の値打ある便宜を與へたけれども修繕に三十弗要したとすればこれよりの純所得は二十弗である。食料及各種の貯藏物が辯護士及その家族に一ヶ月百五十弗の値打ある營養を供するとして、この食料其他の貯藏物の補充及料理人、雇人の働きが合せて恰度百五十弗に相當するとすれば、これより少しも純所得は残らない。次に現金及銀行勘定は、それに依て受ける貢獻即ち支拂ひたる現金及銀行勘定は三千七百八十弗であつて、受入れたる部分は四千弗であるとすればこれより生じた純犠牲は二百二十弗である。召使に對する權利は家の借用權と同様に受入るべき權利と、支拂ふべき義務とを包含するものであつて、彼等が一ヶ月百弗の値打あるサービスを與へ、且つその cost が給料に於て百弗であると假定すれば、その差引残は零となる。同様にして事務所員はその給料五百弗を cost として、助手として

のサービスが亦五百弗の値打ありとすれば差引零である。その法律事務に依て一ヶ月二千弗の報酬を受け、その事務所及職業上の経費が五百弗であつたとすれば差引純所得は一千五百弗となる。最後に B. と稱したものは衣服、時計、寶石等の類であつて、計算の簡便を圖るために、これより生ずる所得と支出は同額であつて、何れも二千五百弗であつたとする。

右の如く假定すれば、その記人は次の如く示される。

Income and outgo of Lawyer

Capital source	Income (credit)		Outgo (debit)	
Stocks & bonds	money rec'd from Stocks and bonds	\$ 2,000 A	money invested	\$ 500 e
Lease rights	Shelter	\$ 100 [B]	money rent paid	\$ 100 f
Furniture	Use of furniture	\$ 50 [C]	Money cost of repairs	\$ 30 g
Food	Use of food	\$ 150 [D]	money cost of food work of servants	\$ 50 h 100 i
Cash	Paid out for bonds	500 E	money from stocks & bonds	\$ 2,000 a
	" " " rent	100 F	money from practice	2,000 n
	" " " repairs	\$ 30 G		
	" " " foods	\$ 50 H		

	"	"	"	servant wages	\$ 100 I	
	"	"	"	clerk hire	\$ 500 J	
	"	"	"	etc.	\$ 2,500K	
Servant Con- tracts	Personal assistance			\$ 500 M	Clerk hire	\$ 500 j
Self	Fees in practice			\$ 2,000N.	Assistance of clerk	\$ 500 m
Etc.	Use of clothes, jewelry and other direct uses			\$ 2,500(O)	money of clothes etc,	\$ 2,500 k

〔B〕〔C〕〔D〕〔O〕等はそれと相殺するべき反對項目を見やるものであつて、これ等を合計すれば

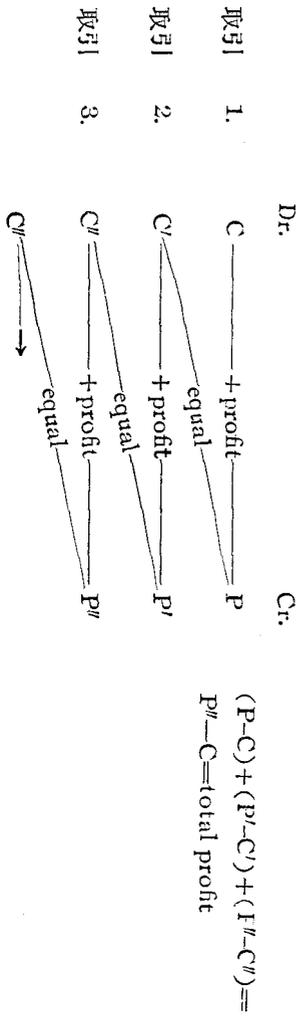
Schlter	\$ 100
Use of furnitue	50
Use of food	150
Use of etc.	2,500
Net income	\$ 2,800

となる。

この事實は Logging Camp の例を示した時相殺不能の殘留分の生ぜることを見たのと同様の理由に基くものであつて、これは經濟學者の謂ふ Consumption である。

然らば所得の觀念はこの自然所得の點に於て停止するやといふに、更にこれを押進めて所謂主觀所得の觀念

のと假定す。故に期首に於ける財産の總價格を cost と考ふれば、期末に於ける總價格はその營業期間中に繼續的に實現せられた price より結果する新しき總價格であるといひ得べく、その變動のプロセスは $Price - cost = profit$ の關係を形成するものと解釋出来る。而して期首に於ける財産價格は借方項目であつて、これが企業經營に依て指導運轉せられた結果適當の price が實現せられたとすれば、それに依て所有財産價格の増大が當然伴はるべく、この場合借方に増價した財産が記入されると同時に貸方に、この實現せられた price 即ち $cost + profit$ が記入せられ、この取引に依て計理學上の收益が発生する譯である。然し營業が猶繼續せらるゝものであるから、これより以後の營業について見れば、新に變更せられたる所有財産價格即ち借方の項目が新しき cost を形成することになつて新しき price の實現に向てそれが指導運轉せらるべきである。故に企業收益の發生を計理學上の收益觀念より表示すれば



の如く示されるのであつて、cost と price との関係の繼續的成立事件が企業經營の一面であるといふとが出来る。こゝに示したところに依りて明かなる如く、計理學上の利益は將來に於ける適當なる市場價格の實現を豫想した後、この豫想が或程度迄實現せられたる場合に於てのみ發生するを常態となすものである。(勿論偶然の事實より所有財産價格の増大を見ることも尠くないけれども、これは經營上の主たる目的ではない。)而して企業經營は將來に於ける Price の豫想に對する信仰を根底として所有財産の指導回轉を統括する關係であるから、計理學上収益豫想をなすことは、主として經營者が將來に於ける Price の豫想をなす如き財産についてのみ考へらるゝ問題である。かゝる豫想材料は企業の種類に依りて異なるべく、又同種の企業の内にも財産の種類に依りてこの収益豫想に對する關係が同様でない。直接収益關係に干與する財産は勿論商品、製造品等の種類のものであつて、間接的にこれに干與するものとしては各種の設備財産がある。所有財産中貨幣及債權等は収益機能について特殊の作用を有するものであつて、(投資關係については貨幣は他の場合の商品と同様の性質を有つこと勿論である。)それ自らについては何等収益關係を豫想するものにあらずといふことが出来る。たとへこれに依る収益關係を生ずることがあつても、それは極めて間接的のものであつて、經營に於ける貨幣の主たる役目はかゝる關係即ち cost の成立及 price の成立等の關係を圓滑にし、且つその關係及結果を明確にするところの働きにある。(cost 及 price 共に貨幣に依りて表示せられる以上、貨幣の側より生ずべき價格變動もあるけれども、こゝではこの問題に觸れないで、これを固定的のものとして price を考へる。)

故に計理學上収益といふときは通常主として商品又は製造品の如き利用財産について cost と price とを比較したときの觀念であつて、これ等の財産について豫想したる price が實現されれば credit entry がなされ、cost が生ずれば debit entry がなされるのである。

計理學上の重要な問題として資本的支出と収益的支出との區別があつて、財産獲得の關係と支出經費とは debit entry となり、財産引渡の關係と收入利益とは credit entry となるものである。この關係も財産獲得と經費支出とは孰れも収益機能の點より見れば同性質のものであつて、共に cost を形成する關係であり、又財産引渡と利益收入とは孰れも price の構成要素であつて、cost + profit を意味するものであることに依て明かに了解出来るであらう。何故に cost について買價と經費とを分ち、又 price について買價と利益とを區別して取扱ふやはずと計算の便宜に基くことであつて、結局に於ては cost と price との關係、換言すれば個人的生産價格と社會的市場價格との關係に歸着する。

故に収益機能に直接干與するこれ等の財産を假に収益的財産と名づければ經營行爲が目的とする利益觀念はこれ等収益的財産についての debit entry を個人的生産價格成立のための事實と見、その credit entry を市場價格實現のための事實と見ることに依て最もよく明かにせられる。而してこれ等兩價格の差額が企業収益であつて、直接には、収益的財産の價格作用を發生し、結局に於て所有財産價格の増大を現はすものといふことが出来る。

以上述べたるところを要するに、フィッシャーの所得概念と計理學上の収益概念とはその内容及性質を異するものであつて、フィッシャーは所得の觀念について *cost* *income* との對立を考ふるに反して、計理學にては *cost* *price* との對立を考へ、収益としては *price* *cost* を意味する點に於て異なる。かくの如き相違を生じたる根本の理由としては、フィッシャーの價值理論及所得理論が常に財貨の個人的利用に根底を求め、客觀的なる交換價值或は交換價格について十分の考察をなさなかつたことに依るのであらう。今價值について次の如き三種の觀念を認め得るものとし、(1)利用價值、(2)生産價值、(3)交換價值、フィッシャーの理論に最も關係深き利用價值説は一方個人的、主觀的利用價值として、その直接消費的見地より見たる人間の欲望の充足を齎らすべき傾向及それより受くる人間の精神的満足を説き、他方客觀説として所謂限界效用説を以て中心とする理論である。即ちその本質上動搖して固定すること少き個人的主觀價值が一の固定的一点を占むるに至る事實を説明せんとして考案せられたるものが右の限界效用説であつて、フィッシャーの理論も亦こゝに根據を有するものといふことが出来る。然るに現在の社會に於ては生産は一般的には、市場のためになされ、生産者の終極利用のためになさるゝものではない。かゝる經濟組織の下に於ける價值及價格關係を個人的利用價值の理論に依て説明せんとすることの誤りは何人にも容易に首肯せらるべく、右の如き試みは現在見る如き資本主義制社會に於ける生産及交換の理論を説明するために、資本主義制發達前の社會状態を假想するものであつて、現時の經濟生活に於ける交換活動の作用を閉却した理論であると思ふ。即ちこの派の人々が説くところは、人が各自己の消費のために生産をなし、

それを使てなほ餘りある部分丈けを市場に持來る場合を假想した考へ方であつて、かゝる場合自己の消費した部分に對してそれより少き利用を有つところの限界效用を胸に描きつゝ市場に來るべきことを想像して居る。然るに現代社會生活の實際はこれと異り、その産物を市場に持來る生産者は他人なる消費者のために造るものであるからこれ等消費者の限界效用に就ては少しも知らざることが通常である。即ち今日に於ては、個人の主觀的利用價値の單なる複雑作用に依てのみ、客觀的市場價値が成立するものにあらずして、かゝる主觀的な個人的利用價値の外に外部より強制されるところの一社會共通の客觀價値が存在し、これが市場に於ける交換價値の決定要件であると見る方が適切なる見解であらう。又フイツシャーが主觀的終極犠牲として、勞働及苦痛を説けることも同じく、今日の交換市場の活動を觀過した議論であつて、中世以前に於ける小手工業者の時代について見れば或程度までその理論はあてはまるべく、その當時に於ては自己が生産に費した勞働及苦痛を直接生産費と考ふことが通常であつたことであらう。

要するに、フイツシャーの所得理論は現在吾々の經濟生活に於て見る如き、交換市場の根底とする價値の觀念について考察が不十分であり、從てその理論は今日の資本主義制經濟組織の發達前即ち未開なる社會に於てか、又は社會主義者が美しき未來について想像する如き理想的共產主義の社會に於てのみ適用を見るべきものである。從て現社會制度を前提とする計理學の理論とは自ら異らざるを得ない。(十三二—二一、)

高瀬莊太郎